
エディプス・コンプレックス

タヒツチカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エディプス・コンプレックス

【Nコード】

N2446W

【作者名】

タヒツチカ

【あらすじ】

SF。超未来、男はカフェで気になる女性にアタックしようとするが。

「エディプス・コンプレックス」
タヒツチカ

1

昼休みを告げるタイムコールが社内に響き渡る。ワーグナーの「ワルキューレの行進」のメロディである。この鬱陶しい曲を聞きながら、社員たちは社外へ昼食をとりに行進するのだ。

そんな同僚たちを尻目に、先月係長に昇進したAはコンセンサスロードをハイブリッド・エアカーで駆け抜けていた。首都上空高速道のロード1を時速180?で飛ばしていた。

Aの務める総合商社の昼休みはきっかり九十分もあるのだが、Aには一分でも惜しかった。首都高速道路・ロード1では法定速度を完全に無視してしまえる。なのでそんなAにとってここは格好の交差点なのだ。オートドライビングで飛ばす他の車を尻目に、彼はマニュアルでの運転にこだわっていた。

首都高速道路ロード1の下にはロード2・ロード3が伸びている。空中に引かれたライト・ラインと立体映像のコンクリート・ウェイに沿ってロード1・2・3が立体的に並んでいるのだ。車種によって走るべきロードが違っている。彼の乗るNSX・RHVは快調にロード1を走り抜けていく。

(下じゃあ安物の外国車がトロトロ走っているな)

Aはそんなロード2・3に行くエアカーたちを見下ろしながらフンと笑った。彼の乗っているハイブリッド・エアカーは純国産の高級車である。彼は多大な努力をしてこのエアカーを手に入れた。それというのもエアカーの質は男性の質だからである。都会の女性たちは軽エアカーに乗るイケメンよりも国産高級車に乗るフツメンをとるのだ。これはおかしなブームだとAは思っているのだが、そ

んな風潮の中で見栄を張る自分のことが嫌いではなかった。

（そういう流れならば俺は俺に良い方に行動する）

それが彼のモットーだった。

世紀も終わりに近付いた昨今、栄華を極めた人類も一寸先が闇かと言われている。いつなごき地表汚染の悪夢が蘇るかわからない。そこで再び求められるのは刹那的な幸福ではないか。ならばその時流に乗って生きるのが最も頭のいい生きたではないか。Aはそう考えてこれまで三十年余りの人生を歩んできた。

しかしそんなAのモットーはここ最近で大いに揺るがされたのである。

彼は、恋をしてしまったのだ。

もちろん、恋人は以前からいた。むしろそのマメな性格ゆえモテる方であった。だが本当に心から女性を愛したことはなかった。つい最近フツた事業部の女がその典型である。彼女は美人だったし、性格も申し分なかった。また彼女とのセックスは非常に興味の沸くものだった。しかし彼女という人間そのものに興味がわくことは結局なかった。彼女が結婚を切り出したのを期にAは彼女をフることにしたのだ。哀れにも事業部の彼女は退社してしまった。だがAはそれを悪びれもせず、それが自分の生き方なのだと割りきっていたのだった。

だが彼は恋をした。

Aは銀色の町並みを眺めながらハイブリッド・カーを走らせる。

正午の太陽がぎらぎらと車を照らしている。その光は立体映像で描かれた擬似コンクリートから世界を見透かすのだ。

（おれは、恋をした）

Aはアクセルをおもいつきり踏んだ。時速200？で東京上空を駆け抜ける。風よりも早く、鳥よりも早く。Aの頭の中では「ワルキューレの行進」が流れていた。昼休みを告げるタイムコールの音楽だった。もう昼休みがとくに始まっているのだ。行進？遅い遅い。さあ走れ、走れ。コンセンサスロードを飛んでゆけ。彼女が待

っているのだ。

彼は目的のカフェへと、はやる気持ちをおさえられなかった。

「いやっほおい！」

（ああ、恋とは素晴らしいものだなあ！）

コンセンサスロードの先、網目の中心には「ターミナル」が存在する。東京の中心にそびえる鉄の城。その名のとおり、空港である。テレポート・スポットやコスモポートが備えられた日本の交通の最重要拠点である。

その「ターミナル」の周囲には数多くのショップが隣接している。その多くが観光客を狙ったものであるが、日本最高峰の店舗も同時に数多く立てられている。そのなかでもひとときわ輝く店がある。

ターミナルカフェ「モンブラン」。「ターミナル」周辺の店舗の中で最も巨大なカフェである。その歴史は五十年にも及び、地表汚染の前から存在する数少ない店の一つだ。歴史ある日本のコーヒーストップの味を守り続ける老舗、と言ってもよいだろう。

「モンブラン」には「ターミナル」のそばというだけあって様々な客がに訪れる。都内のOLやサラリーマンはもちろん、テレポートしてきたソビエト大統領がやってきたり、火星勤務の作業員がわざわざコスモポートを利用して訪れることもあるのだ。「モンブラン」は国籍、人種、惑星を問わない全ての人々の憩いの場なのだ。

その様々な人々の求めるのがオリジナルブレンドである。ブルマンの酸味のある締まった味を保ちながらも炭火焙煎した豆本来の濃厚な奥行きを感じさせる、口当たりの良いその味はこの店でしか絶対に味わえないものなのだ。

そしてブレンドの味もささる事ながら、オリジナルのレタスサンドも非常に有名である。日本国内で自然土から育てたレタスにマスタードソースをかけたシンプルなものだ。だがこのソースが素晴らしい。マスタードのピリっとした風味を基調としながら様々な野菜を贅沢にも融け合わせ、ひとつの味にまとめているのだ。もちろん言うつまでもなくすべて自然土から育てた有機野菜である。現在一

般市場に出回っている人工土によってつくられた人工野菜とは見た目も、味も別モノである。地表汚染前の野菜の風味を完全に再現した逸品なのだ。

しかしAの目当てはブレンドでもレタスサンドでもない。彼ははある女性を眺めるためだけに五十年の歴史を持つカフェ「モンブラン」を訪れるのである。

（恋は盲目である。そういう流れならば俺は盲目であることにする）彼のモットーは微妙にズレながらも存在を続けていたのである。

Aご自慢のハイブリッド・エアカーは大ゲートをいくつも通りぬけ、幹線道路網を飛び越えて行き「ターミナル」のカーステーションに辿りついた。Aはコインパークにエアカーを止めそそくさと「モンブラン」の中へと足を運んだ。

入口のところで看板娘である立体映像のCGG（コンピューター・グラフィック・ガールである。以下略させていただきます。何しろ長いのだ）が彼を出迎えたがAの眼中に入ることはない。しょんぼりとしたCGGを尻目にAは店内をぐるりと見渡した。

（おおっ、愛しの君よ！）

テラスウィンドウの一番端の席——コスモシャトルの出発がよく見える席である——に彼女がいた。長い黒髪を後ろで束ね、足を組み、儂げな目で外を見る女性、彼女こそがAの恋焦がれる女性である。彼女はマスタードソースがたっぷりかかったレタスサンドをフオークでつつきながらエスプレッソを口に運んでいる。今日も変わらぬその姿にAは安堵を覚えた。

（よし、今日も隣には誰も座っていないな）

これでAの日課は終了である。彼女がひとりで寂しげに昼食をとっている姿を見ることが、それこそがAの日課なのだ。話しかけたことなど過去の一度もない。だが彼を小心者と嘲るものがあるだろうか。彼は生まれてこのかた「純愛」というものを信じてこなかった。女を真剣に愛したことがなかったのだ。

そんな彼が初めて感じた「純愛」。その前では彼の恋愛スキルは中学生のそれと同等になってしまふのであった。木陰から見守る純情な中学生。甘い記憶。ラブレター。いまやAは脳内桃色状態なのであった。

しかし、どうせ「モンブラン」に来たのだと、Aは何か食べることにした。彼女、思いの女性が見えるカウンター席に足を運び、「モンブラン」のマスターに「いつもの」と注文した。するとマスターはにやにやとした笑みを浮かべながらAに「いつもの」をくれてやるのだった。

このやりとりは「いつも」行われているのだった。

キャラメルマキアート。Aの「いつもの」である。カフェ「モンブラン」は純粋なコーヒースョップである。なかでもブレンドにはかなりの誇りを持っている。ここに訪れる客の大体はブレンドを注文し、満足して帰っていく。だがこのAという男、コーヒーが飲めなかった。しかしAはこの店に来なければならぬ。愛しの女性のためである。そこで善良で慈悲深いマスターが用意したのが裏メニュー・キャラメルマキアートである。本来ならばこんなものは純粋な喫茶店で出すべきものではない。飲みたきや安コーヒースョップにでもいってろ、というモノである。これはAのためだけに用意されたものだ。あまりにも慈悲深いマスターはAの恋をこうして応援しているのだった。

甘く香る「いつもの」をズズルと飲みながら、Aはテラスウィンドウ席の彼女を眺める。Aはこれだいいと思っていた。このままでいいと思っていたのだ。この純情が壊れるのを恐れていた。恐れていたのだ。

2

そんな折のことである。

Aには友人のBという男がいた。ある日AはBと「モンブラン」に立ち寄る機会があった。Aとしてはいとしの君の存在を他の男に

知らせるのははばかられた。だがBは妻帯者の上、だいの愛妻家であり、さらに彼の妻は鬼のように浮気を攻め立てる君なのである。そのためAはこのBにだけはいとしの君のことを伝えていたのだった。

そしてこの日二人が「モンブラン」に訪れたときまさにそのいとしの君もいつものテラスウィンドウの一番端の席に座っていたのである。そんないとしの君の姿を見てBはため息を漏らした。

「なるほど、本当に美人だな」

「だろう、だろう」

Aは「いつもの」キャラメルマキアートをすすりながら答えた。

「まさか『いとしの君』が実在するとは思わなかった。てつきりお前の想像上の人物かと思っていたぞ」

「しかし、お前の目に映っているのは」

「ああ、この世を忍ばぬ美人だ」

Bはうつとりしていとしの君を見つめていた。注文したブレンドに全く口をつけずに、だ。そんな彼の姿を見てAは嫉妬を感じていた。

（まさかBにいとしの君が奪われてしまうのではないか……）

「ほらほら、B、そんなに見つめてくれるな。穴があいてしまっただろう」

「別にお前のものじゃないだろう。眺めさせてくれよ」

「ほらほら、ふざけるな。君の嫁さんに告げ口してやろうか」

「おっと、それは洒落にならん」

Bはわざとらしく大げさに驚いてみせた。しかしBはわりと本気でいとしの君に興味を持っているようだった。それ程に彼女の美貌は見るものを魅了するフェロモンに溢れているのだ。

「ゴホン」

Bがやはり大げさに咳払いをしてみせる。このわざとらしい演技は高校時代の演劇部の名残だと彼は言う。落第劇団員の名残である。「相談があるんだ、A」

「なんだ、改まって」

「俺の仕事を知っているか」

「登録管理局だろう」

「ああ、そうだ」

登録管理局。それは世界中、あらゆる国の国民全てに与えられた「住民登録証」を管理する役所のことである。この「住民登録証」には氏名、性別、年齢はもちろんのこと、DNAの配列パターンやアレルギー物質、持病や好きな食べ物までありとあらゆる個人データを管理する重要書類なのである。

Bは登録管理局で働く精神気鋭な熱血公務員マンであった。

そんな彼はニヤリと笑って言葉をつなげる。

「彼女の登録証をコピーしてきてやろうか」

「そんなことできるのか」

「造作も無いさ」

Bは首を振って「やれやれ」とつぶやいてみせる。だがAにはBの意図が分からなかった。

「何が目的だ」

「失礼だな。協力だよ」

「協力？」

「君のために彼女のデータをひっぱてきてやろう。君はそれを見て彼女にアタックしてもいい。だがもしも、もしもだぜ？ 失敗したらおれが彼女をゲットさせてもらう。ああ、先に目をつけた君も立ててあげよう」

BはAに向かってウインクを飛ばす。Aはなりふり構っていられたなかった。

彼女を手に入れるためならこの気障な男に魂を売り渡すしかなかった。それにこれはA自身にとって魅力的な提案に思えたのだ。

「よし……飲んだ。頼んだ、B」

「任せなさいよ。一週間で用意してやる」

ビッ、と指を振ってBは一人「モンブラン」を出た。その後姿を

眺めながらAは発起していた。

（あんな男に彼女がなびくはずがない……）

（おれが彼女をゲットしてやる……）

底知れぬ自身がAのなかに湧き出していた。それは噴火する直前の活火山のようにどくどくとした煮えたぎる感情であった。

3

Bとの約束からすでに七日経過していた。しかし一向に彼からの連絡がAには来ない。

Aはイライラしたまま誰もいない職場でキーボードを叩いていた。積み重なった残業を今夜中に潰さなければならぬのだ。そのせいでAは苛立っており、ここ最近「モンブラン」に通うこともままならなくなっている。Aはいとしの君を眺めることのできない日々 frustrate ションが溜まっていくのを自ら感じ取っていた。

（おれは今、絶頂にいらっている）

カタカタというキーボードを叩く音が夜のオフィスに響き渡る。

他に聞こえるのは巡回警備ロボットの音だけだ。ここにAの他の人間は誰もいない。この会社のセキュリティは電子ロック・キーがある限り万全なのだが、企業イメージの一環として巡回警備ロボットを配置しているのだ。

（こいつら、ワインワイン五月蠅いな）

（こいつらをベコベコにしてやりたい）

（だがきつとおれは負けるのだろっな）

（なんせ警備ロボットだからな）

むしゃくしゃする気持ちを残業の書類の束にぶつけ、Aはなんとかすべての仕事を終わらせた。そのときすでに時刻は午前三時を回っていた。

「ふう、おながすいた」

Aは何かを口に入れようと社員食堂まで回ってみたが、そこには味気のない自動販売機食しかなかった。彼にはいまさらこんなもの

を食べようという気持ちには到底なれなかった。

「そうだ、『モンブラン』へ行こうかな」

カフェ「モンブラン」は軽食メニューも深夜休まず営業していることでも有名である。東京交通の不夜城「ターミナル」のカフェなのだから当然のことなのではあるが。

Aはオフィスのセキュリティもいじらずに駆け足で愛車のNSX RHVに乗り込み、上昇、出発した。単純に空腹のためである。

彼は眠気半分、食欲半分で走りだした。

ハイブリッド・エアカーは東京の夜空を飛んでいく。まるでエアロードライトを辿る蜘蛛のように。この時間にはロード1を飛ぶエアカーは他に一切いなかった。そこでAはかつて無いほどにアクセルをただ踏み込んだ。見境はなかった。ただ、ただ早く走りたかった。一速、二速、三速。スピードが上がっていくに連れだんだんと外の風景が絵から線になっていく。Aはスピードメーターを見るとすらしなかった。

（おれはむしゃくしゃしているのだ）

エアカーの速度はすでに時速400?を超えていた。Aの車は文字通りに一陣の風となった。ハイテクロノジーシティの空をかける閃光だった。

（おれは恋をしているのだ）

（おれはむしゃくしゃしているのだ）

（まさか、まさかだ。Bからの連絡が無いのはすでにいとしの君とよろしくやっているからではないのか）

（おれは出し抜かれたのか）

エアカーはすでに「モンブラン」のコインパークへ辿り着こうとしていた。

（ああ、胸くそ悪い）

Aは喉の下に熱くこみ上げるものを感じた。

そしてエアカーのハンドルに嘔吐物をぶちまけた。

「くそっ」

Aはハンドルをぶつたいた。

すでにコインパークのゲートが目の前にある。
だが車のスピードは一切止まっていなかった。

（オートドライビングを解除していたんだ！）

Aは必死にブレーキを踏んだ。しかしエアカーはすぐに止まるはずもなく、コインパークのゲートをやぶってパーク内へ飛び込んでしまった。

（止まらない！）

鈍い音がして、エアカーがひどく揺れた。その衝撃でエアバックがハンドルから飛び出し、Aの顔に自らの吐瀉物がかかった。酸っぱい胃酸の匂いを感じながらAは猫を轢いてしまった、と思った。こんな時間にコインパークを利用する人はなかないだろう。夜の「ターミナル」は眠らないが深夜にエアカーを飛ばす人は殆どいない。深夜の客は大抵がコスモポートやテレポートスポットの利用者なのだから。

Aはエアカーから這い出して、何にぶつかったのか確認しようとした。

（おおかた、ポールか何かにぶつかっただけだろう）
だがそのAの予想は大いに裏切られた。

彼が轢いたのは人だった。
女だった。

「これは……」

彼が轢いたのは、いとしの君だったのだ。

4

Aの頭は混乱を極めていた。

（なぜ？ なぜこんな時間に彼女がここにいる？）

（なぜ？ なぜおれは彼女を轢いてしまった？）

とりあえず、Aは彼女の怪我の状態を確認した。彼女の四肢はす

でにあらぬ方向へと曲がってしまい、さらには頭から血を流していた。だくだくと流れる血を眺めてAは確信した。

（これは、死んでしまう！）

Aは取り乱した頭で今するべきことを考えた。現状の把握を後回しにすることにした。そして自分の保身だけを考えたのだ。

（どうすればおれは捕まらないですむんだ……！）

Aは虫の息の彼女をエアカーに引きずり込んだ。とりあえずどこかへ運ぼうと思ったのだ。救急車を呼ぶことも考えたがそれは自分の罪を申告するようなものだ。エアカーにはすでに彼女の血痕が多量に付着している。Aの両手も鮮血に染まってしまっている。

（逃げる、逃げるんだ）

都合よくコインパークにはAと彼女の他を置いてだれもいなかった。Aは急いでエアカーを発進させた。ロード1を通っていけば他の車に目撃されることもない。Aは安全運転で飛ばした。Aはいやに落ち着いている自分を感じていた。自分のすべきことが冷静に浮かんでくる。

（おれはつかまらない）

東京には、開発区が多く存在する。その中でも荒川区以降の旧埼玉県地域は未だ未開発の広大な廃墟があったりするのだ。以前地上に放射能の灰をふらせた地表汚染テロの影響で東京を除く関東地域は立ち入りが禁止されている。しかしそれでは住民の配置が困難であるため、「東京拡大計画」が行われた。その一環として千葉、埼玉、神奈川、は東京に統合されることになった。しかし開発は遅れを極めている。そこが現在は汚染されていない廃墟としてそびえている。そのことをAは思い出していた。

「はあ、ああ……」

後部座席からは死にそうないとの君の声がする。それを聞いてAはいたたまれなくなった。

（彼女は出血多量かショックで死んでしまったらう）

「お嬢さん、苦しいですか」

「ああ、はあ……」

彼女は声を発することもできなくなっていた。喉から出た血が固まって、塞いでいたのだ。自分の頭流れる血で視界も開けず、ただただ呻くことしかできなかった。

ふと、Aはエアカーを止めた。

（そうだ）

（今、おれは彼女を手に入れたのだ）

Aは後部座席に向かった。そこには何もできず、四肢も塞がれたいとしの君が横たわっていた。彼女は、完全に無防備だった。

Aは彼女の青く黒ずんだ唇をなめた。

「血の味がする」

（おそらく血がないので青いのだろう）

そして彼女の血だらけの服を剥ぎとり、白い乳房をあらわにさせる。Aはそれを強引に揉みだいた。それが痛いのか、彼女は身を擦らせる。だが彼女は体を満足に動かすこともできない。もはやAから逃れるすべはなかった。

「血の味、でもその中にあなたの味がする」

Aは彼女の全身をべろべろとなめた。彼女を清めようと思ったのだ。快感を与えて、幸せに死ねるようにしたのかもしれない。だが正味のところ、単に彼女が欲しかっただけなのだ。

Aは下半身を露出させ、強引に彼女の恥部にあてがった。そこはまったく濡れていなかったたので、血を塗り込むことで潤滑油にしようとした。ぐちゃぐちゃと、彼女の内蔵と血溜まりの匂いと音がエアカーの中に響き渡る。

そしてついにAは彼女を手に入れたのだった。強引なピストンを繰り返し、五分ほどで果てた。簡素なやりとりだった。彼が果てるの間、彼女はただ呻いているばかりだった。何をされているのか分かっていなかった。

すべてをやり終えたAは彼女の首を締めた。

「この女！」

「売女め！」

「殺してやる！」

「貴様、Bと会っていたな！」

「セックスしたな！」

「非処女め！　がばがばの穴め！」

「死ね！」

彼女の顔はふぐのように膨れ上がり、青ざめていった。そして口から大量の血液と胃液を吐き出して、死んだ。息の根が止まっていた。

「……はあ、はあ、はあ」

「……いとしの君よ」

Aは再びエアカーを飛ばした。そして旧埼玉県郊外の廃墟に彼女を埋め、自宅へと逃げ帰った。シャワーを浴び、丹念に汚れを体から洗い流した。血と、泥と、吐瀉物である。そしてベッドにこもってひたすら念仏を唱えた。翌日、会社を休んだ。

そしてまた翌日、Aが出社するとBがAのデスクの前に立っていた。ひどく慌てたようだった。Aはてっきり自分の犯行がばれたのかと思った。あの日以降テレビや新聞も遠ざけていたので事件の捜査の具合も一切分からなかったのだ。

「よおA、遅くなつてすまない」

「どうしたんだ」

Aはなるだけ冷静をよそおうとした。しかし冷や汗が耳の後ろに流れていくのを感じた。

「例の、いとしの君のことだ。住民登録表証、調べてみたんだ」

Bは鼻の穴がぶくうと膨らんで、ひどく興奮していた。

「彼女の名前は会田ミツ。性別は女性、持病はアルツハイマー。そして年齢は……」

彼はAの目を見つめた。ごくろ、とつばを飲んだ。

「五十歳だよ」

「なんだって！ あの女性が五十歳！ そんな筈ないだろう。あんなに美しかったじゃないか」「かった？」

「いや……」

A はかぶりを振った。あわてて言わなくてもいいことを口走ってしまうところだった。

「ああ、彼女は美しい。それは美容手術の賜だ。彼女は子供を生んだ後、保護施設に預け美容形成手術を頻繁に行なった。そのためにあんなに美しくなったんだ」

「そうか、そうだったのか……」

A は死ぬ間際の彼女のゆるい膺の感覚を思い出していた。

「でだな、本題はここからなんだよ、A」

「まだあるのか？」

「ああ、彼女のDNA配列だが、非常にお前に似ているんだ」

「どういう意味だ？ 生き別れの姉か何かなのか？」

「いや、それにしてもあまりにも似通っている」

B はためらうようにしてぼそっと言った。

「彼女はね、お前の母親なんだ」

エディプス、コンプレックス【(ドイツ)? dipuskomp
lex】

男子が母に対して性的な思慕を抱く無意識の傾向。ギリシャ神話のオイディプスにちなみ、フロイトが精神分析学の用語としたもの

—— 広辞苑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2446w/>

エディプス・コンプレックス

2011年8月30日03時23分発行